今週の為替相場見通し（2020年6月29日）

総括表			先週の値動き		今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		106.08 ～ 107.45	107.21	106.00 ～ 108.00
ユーロ	（ドル）		1.1168 ～ 1.1348	1.1218	1.1050 ～ 1.1350
（1ユーロ=）	（円）		119.31 ～ 121.08	120.32	119.00 ～ 122.00
英ポンド	（ドル）		1.2314 ～ 1.2541	1.2338	1.2150 ～ 1.2400
（1英ポンド=）	（円）	*	131.77 ～ 133.99	132.26	130.00 ～ 133.00
豪ドル	（ドル）		0.6802 ～ 0.6974	0.6865	0.6770 ～ 0.6920
（1豪ドル=）	（円）	*	72.74 ～ 74.42	73.61	72.20 ～ 74.70

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

市場営業部　為替営業第二チーム　玉井 美季子

（1）今週の予想レンジ：　106.00 ～ 108.00 円

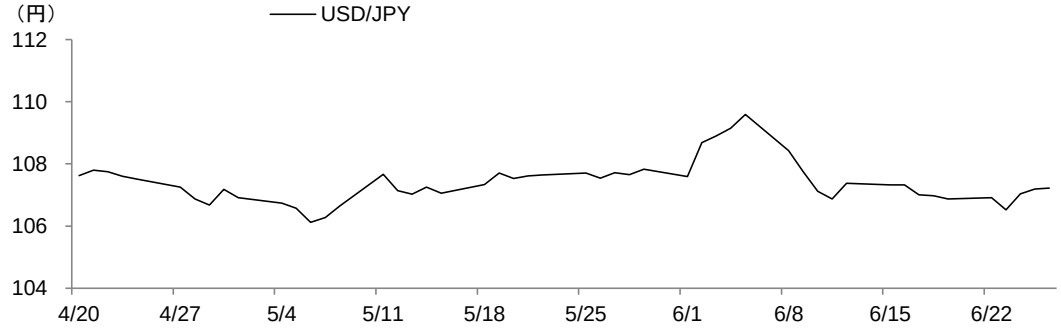
（2）ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週後半に円安が進む展開。週初22日、106円台後半でオープンしたドル/円は、米国で新型コロナウイルスの感染第二波への懸念が高まるものの、ドル/円への影響は限定的で終日小幅な値動きとなった。23日は、ナバロ米大統領補佐官が中国との通商協議は終わったと発言し、米中関係の悪化が懸念され円買いの動きが強まるも、同報道を否定するヘッドラインを受けて反発し、一時107円台前半まで上昇した。その後は、米中関係悪化懸念が和らいだことや欧州でのPMIの結果が好感されてリスクオフ巻き戻しの動きが進むとドルが売られ、一時週安値の106.08円まで急落した。24日は、米国が31億ドル相当のEU・英国製品に新たな関税を検討しているとの報道や、IMFが世界GDP予想を下方修正したことで、前日から一転してリスクオフのドル買いが進み、終盤にかけて107円を上抜けた。25日は、前日の流れを受けて、じりじりと値を上げる展開が続いた。NYオープンにかけて一時週高値の107.45円まで上昇したが、その後はリスクオフの流れが一服し、ドル買いが巻き戻された。26日は上値の重い動き106円台に下落したが、テキサス州にて経済活動の制限を一部強化すると発表され、リスクオフのドル買いが進行。107円台に乗せ、107円台前半で越週した。

今週のドル/円は上値の重い展開を予想する。米国では過去最多となる新型コロナウイルス新規感染者が出る等、第二波が懸念されている。テキサス州では段階的に行われている経済活動再開を一時停止することが決まっており、他の州でも同様の動きが広がる可能性が出てきた。リスクオフムードが払しょくできない中、ドル/円はクロス円の下落とともに上値の重い動きとなるだろう。ただ、リスクオフムードの中ドルも買われやすく、下値も限定的となりそうだ。今週は米国で重要指標の発表が相次ぐが、市場予想ほど改善が見られない場合には、新型コロナウイルスからの回復の遅れが意識され、こちらもドル/円の重しとなるだろう。7月2日には6月雇用統計の発表があり、雇用者数+300万人、失業率12.5%と改善が予想されているが、新規失業保険申請件数は引き続き高水準が続いているほか、前月の失業率は一部データが誤っていたとの発表もあり、予想ほど改善しない可能性に注意が必要だ。

（3）先週までの相場の推移

先週（6/22～6/26）の値動き：　安値 106.08 円　高値 107.45 円　終値 107.21 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部　為替営業第二チーム　大谷 未央

(1)今週の予想レンジ:　1.1050　～　1.1350　　119.00　～　122.00　円

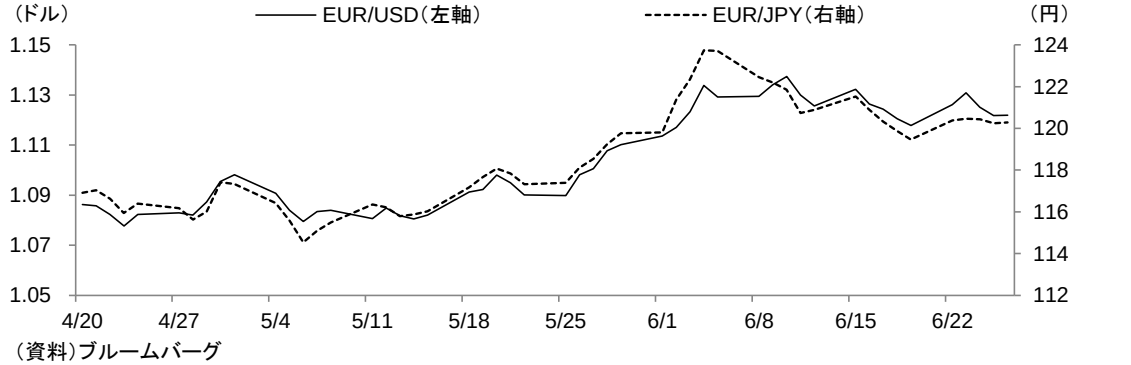
(2)ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半にかけてユーロ安に向かう展開。週初22日に1.11台後半でオープンしたユーロ/ドルはオープン直後に週安値である1.1168をつけた。その後ショルツ独財務相が復興基金への合意や経済活動再開に対して前向きな姿勢を示したことにより1.12台前半まで上昇。その後米株価や原油先物が堅調に推移する中、1.12台後半まで上昇した。翌23日はナバロ米大統領補佐官が「中国との通商協議は終わった」と述べたことにより米中関係の悪化を想起させ、1.12台前半まで下落。その後同報道が否定されると1.12台後半まで値を戻す展開に。また、欧州各国でPMIが予想を上回ったことが好感され、ユーロ買いが強まると週高値である1.1348まで上昇した。24日は「米国が31億ドル相当のEU・英国製品に新たな関税を検討」とのヘッドラインが嫌気され、リスク回避のドル買いが強まり1.12台半ばまで下落。25日はECBの新レポファシリティーに関する報道が発表されるとユーロ買いで反応するも、その後はユーロ売りとなり一時1.11台後半まで下落した。26日はラガルドECB総裁が新型コロナウイルスを巡り「最悪期は恐らく過ぎたが回復は不完全なものとなる」との見方を示すも市場の反応は限定的。その後は1.12台前半でもみ合う流れとなり1.12台前半で越週している。

今週のユーロ/ドルは上値重い推移を予想する。新型コロナウイルス復興基金への期待感や経済再開期待から6月半ばにかけて堅調に推移していたユーロだが1.14ドル前半で頭打ちになっており、現状1.12台で推移をしている。今週29日にはメルケル独首相とマクロン仏大統領による復興基金に関する会談を予定しているが、復興基金の議論は難航しており、7月に決まらない恐れもある。また新型コロナウイルスの欧州第二波懸念も相応にあり、ユーロは上値が重く推移すると予想する。重要指標としては29日(月)にユーロ圏6月消費者信頼感指数、30日(火)にユーロ圏6月CPI、7月1日(水)にユーロ圏6月製造業PMI、3日(金)にユーロ圏6月サービス業PMIの発表を予定している。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/22～6/26)の値動き:　(対ドル) 安値 1.1168　高値 1.1348　終値 1.1218
(対円) 安値 119.31　高値 121.08　終値 120.32



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ:　1.2150 ～ 1.2400　　130.00 ～ 133.00 円

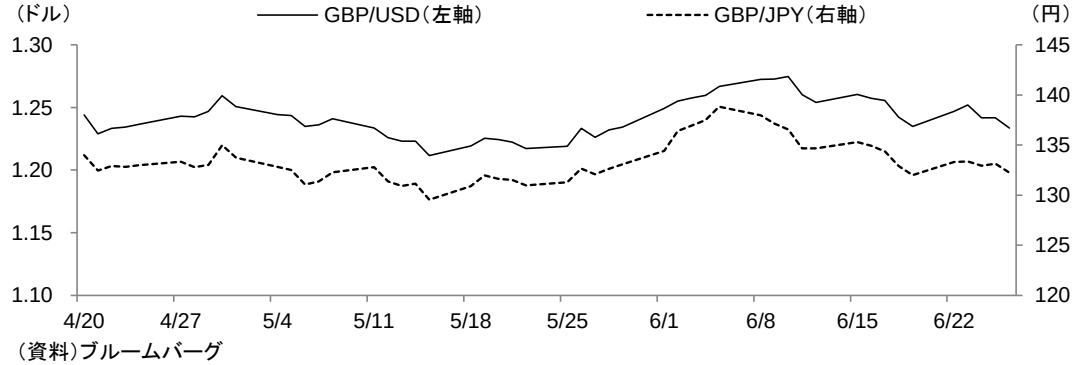
(2)ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、方向感を欠いた横這い。ただし、予想外の上昇が先行した結果、取引水準は、想定したよりも明確にポンド高方向に偏った。週明け早々(22日)のポンド高は、ドル安の裏返しと思われた。並行してドル/円の膠着が先行したことから、ポンドは、対円でも明確に水準を切り上げたが、対ユーロでは小動き。ドル安の要因は定かでなかったものの、米南部州でのコロナ罹患者数の急増などを嫌気した可能性は考えられた。翌23日、ドル/円が急落すると、ポンドは対円でも頭打ちから反落に転じた。ナバロ米大統領補佐官が、中国との通商交渉は「終わった(決裂した)」と述べたとの報が、世界景気への悪影響、リスク回避との連想から円高を誘った。その後、トランプ大統領や、ナバロ補佐官自身が、同報を否定したものの、ドル/円の上値は重く推移した。24日は、一転、ドル全面高に展開。ポンドは、対ドルでも明確に水準を切り下げた。ただ、ドル買いの材料とされたのは、「米が31億ドル相当のEU・英製品に新たな関税賦課を検討」との観測や米におけるコロナ感染第2波への懸念で、週前半にドル売り材料と読まれたはずの要因が、何故かこの局面ではドル反発の要因とされた。週引けに掛けて、ポンドは対ドル、対円、対ユーロと全面安に展開。この局面のポンド安は、メルケル独首相が、「英はEUとの緊密な経済関係を断ち切った代償を払う必要がある」「(ジョンソン首相率いる)英政府はEUとの将来関係協定を合意させることに意欲がないのかもしれない」などと述べたことを嫌気した可能性が考えられた。ポンドは全面安で週の取引を終えることになったが、特に対ユーロでは3月26日来3か月振りの安値を更新する0.9100まで水準を切り下げた。

今週の英ポンド相場は、続落を予想。全面安で先週の取引を終えたものの、対ドル、対円で、ポンドは、引き続き3月末来の横這いの域を出ていないし、今後も、当面、横這い推移を続ける可能性が高いものと見込んでいる。ただ、今週、ポンド続落を予想するのは、先週末の安値更新で、対ユーロでも続けてきた横這いの水準を(ポンド安方向に)切り替えた可能性が考えられるから。それ以上に気掛かりなのは、上述、メルケル独首相の発言。英側には、6月4日にゴーブ英内閣府担当相が示唆したように、EU閣僚理事会の(6か月持ち回りの)議長国が、7月から(クロアチアから)独に代わることで、将来関係交渉に弾みがつくことに期する向きがあった。メルケル首相の上述発言は、(これも交渉の一環かもしれないが)そうした期待感に真っ向から冷や水を浴びせたようにも見える。元々、年内に(交渉自体は10月までに？)交渉が大きく進展する可能性は低いと見られていたものの、今の段階で、その見通しが更に悲観的な方向に傾くのは、ポンドが嫌気する材料と考えられるだろう。なお、ベイリー総裁は、22日、今後、金融緩和を引き揚げていく過程で、利上げの前に資産購入の引き揚げを開始する意向を示した。カーニー前総裁の方針とは逆とのことで、現地では若干の関心を集めたが、ポンドが材料視した様子は読み取れなかった。実際、どちらが先でも、ポンドに意味のある影響を及ぼすとも思えないし、いずれにしても、現時点での議論は「頭の体操」の域を出ないように感じられる。英経済指標では、今週、30日(火)に英1～3月期GDPの確報値が発表されるが、改定値(前期比-2.0%)から余程外れた数字でも出ない限り、ポンドが材料視する可能性は低いだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/22～6/26)の値動き:　(対ドル) 安値 1.2314　高値 1.2541　終値 1.2338
(対円) 安値 131.77　高値 133.99　終値 132.26



(資料)ブルームバーグ

4．豪ドル

アジア・オセアニア資金部　シドニー室　安藤 愛

(1)今週の予想レンジ:　0.6770　～ 0.6920　　72.20　～　74.70　円

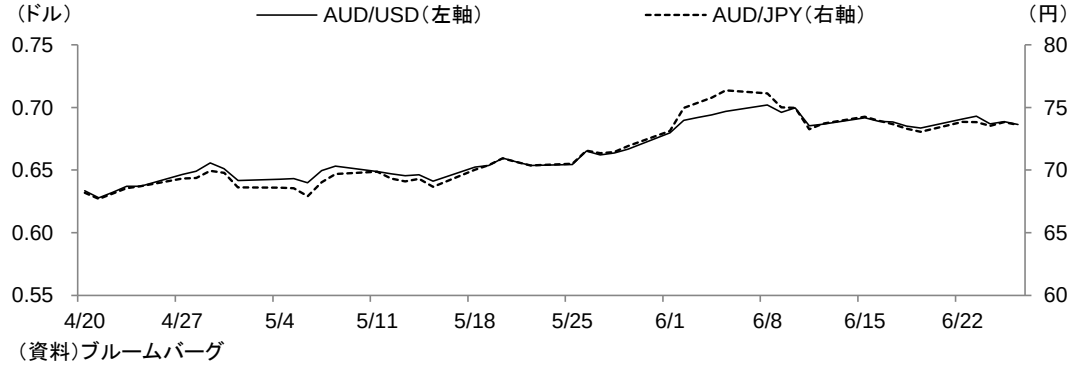
(2)ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.69を挟み揉み合い。前先週末に豪ビクトリア州でCOVID19の市中感染拡大を理由に緊急事態宣言の延長とが決定されたことを受け、週初22日は0.6810台まで下落してギャップオープン。その後は、下落してスタートした米株先物がプラスに転じると買いが優勢になり、1週間ぶりに0.69を若干上回るレベルで引けた。23日、ナバロ米大統領補佐官による「米中通商合意は終わった」発言を受けて、一時0.6850台まで売り進まれたが、その後その報道内容が否定されると、往って来いの展開で0.6930台まで戻した。24日、ニュージーランド準備銀行(RBNZ)は政策金利を据え置く一方、声明文にて量的緩和拡大の可能性や通貨高について触れたことから、NZドルは売りで反応するも、豪ドルは動意薄。その後、米国がEU・英国製品に対し新たな関税を検討、米南部の州で新規感染者数が過去最高とのヘッドラインを受けて、リスクオフが強まり株価が大幅下落。豪ドルも0.6870近辺まで下落した。25日、特段材料ない中、0.6860を挟みレンジ推移。26日、テキサス州が新型コロナウイルス感染拡大を理由に経済活動を一部制限したことが報じられると株安・米ドル買いの流れが強まり、豪ドルは一時0.6840台まで下落。その後0.6860台まで小幅戻して引けた。

今週の豪ドルは方向感の無い展開を予想する。先週は米南部の感染者急増や米国による対欧関税等の報道がリスクセンチメントを後退させ、株価はもみ合い、豪ドルも狭い範囲でのレンジ相場となった。6月23日に市場を騒がせたナバロ氏による米中合意にかかる発言は単なる「失言」ということで片づけられたが、久しぶりにネガティブニュースに大きく反応した印象。足元、市場はポジティブニュースにのみ反応していた印象があったが、米中関係の悪化が通商合意に及んだ瞬間に、大きくリスクオフの動きが入ることが確認された。このタイミングで米中合意を白紙に戻すことは無いと思われるものの、新型コロナ第2波とともに米関税にかかる報道、そして大統領選の行方についても引き続き注意を払いたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/22～6/26)の値動き:　(対ドル) 安値 0.6802　高値 0.6974　終値 0.6865
(対円) 安値 72.74　高値 74.42　終値 73.61



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。